



易 詩



特別  
A5  
6673  
91  
早稲田大学図書館



安永六丁酉天



歳祝

春ておくれやうきふと  
あこしよ人よ

菊と取う

初禮尔

秋とまうし

朴齊

嬉しき水

聖節

寝る子と去とありたるあこしよ

龜遊

梅と江連とに軒と清うら 飛兒

名しあふ浦の言海苔にかせて 草牛

あこしよ人よ

あこしよ人よ

春さや初日れ秋の秋と又 鳥文

信眼

初うらと梅と飛とあこしよ人よ 慈三

信り信成や中りく明とる川と 玉川

え見もをなてあふ保ふ人よ、流 草牛

うららしと手なうのや成む山 菅原

よ坂川眼よりけりあけてむの表 宜梅

鞍馬

中とせあはりし四を言ふに  
ゆきのまをむく

み水や汲ぬ先うゝ氣七信一 我斗  
去ふ世や今おハ娘一き起心 乙葉  
涙をぬやふよあく涙の 初き七 乙六  
年れ新や何きく娘七思ひまは 乙七  
ふきくうゝまてまふれと君衣初 可性  
去駒やあら七いんて身ま出死 乙羅  
あめくまうすお川原藤の君うゝ先 望曉  
娘ハ一也旅住居て七 正月 五葉門 竹徒  
ゆ一眠く見や蓬葉れ山の 信小 龜兜

早草

乾押一臺の多れしと  
言條乃短廻し再す

け草伝ふらうゝむう勢て 梅柳一 鳥文  
除ねよ掃く雪やあく涙の 暮まて七 起見  
初く雪く柳七之川ま一 七葉 葛屋  
縁掃て猫の足まくゆきに夕架 宜梅  
娘一さと惜也とまの入りうゝ 草牛  
帰つきや下戸ぬぬ家七飲ハ一 龜遊  
我々こ一也梅一えを月まが 我斗  
あめくうゝ指ぬゝ涙まのひあう七 乙六  
縁掃やましめてた身古死中 乙葉  
あふ家といしなま短一市れ齒乃 乙七  
子而分や唇の唇あふ 神まいり 乙羅

併にや伸あうるうかみ見月  
の性  
樂一さや考ししてふむとね  
情徒  
又らりりし奉掛くりさしれ考  
里曉  
街をうも者のやふこあゆるる  
玉川

経あり

街庵れをよとこし欠  
社中かのくあふ寺院り  
舎れさ欠の席とりよきて

年といふ垣々あれさし梅の花  
如三

あそゆよ安き、紙衣ふま 朴斎

入る海といふ名れ速ひと疾されく  
文支  
草こやふあり くと如やふく  
龜遊  
月も七色あられやう登うさ  
龜兜  
草苞 喫けハ若荷や 功草 我斗  
先任の弘め玉れて 庵所 護伽 尊后  
臆かこひきき 下結の 片く 情徒  
き川うりと新所捨れ明えふも  
常牛  
女唐紙たす寸 智恵を貸さふ  
力了  
讀とよめハ 倣名平七又むして  
馬文  
世牙出しれ 流を多うり 流上 障  
やき常  
神あり 障一 目蓮の あゆる 四  
玉川  
世存りさふき 今度れ 一 振  
花六

望み響の甲斐はくかといはけさむま乙葉  
甲斐いあきくハ涼ーかり魚ー望曉  
七川ちりし切道たらきたる桶の編宜林  
全頼川て寝てくれり夕景  
月ハきくじうー街角ふかき原七  
けん房りほんとあー。晴吟  
あの子母はあきくううううかりれ  
是願て蒼のまハおぬまの  
ま今世れ初る能く嘆りよひ  
雪のきくハ 涼身 無名

歳暮

言れあゝ日ハ横船よき多き世  
きくーそのうねねハ世乃  
小家ふやうりて望し四角の  
経歴も降りなく房よゆれハ  
程多小まも色よねき

腫房

きー波や松よあれて

世のきくハ

